



## 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連

石本, 雄真  
倉澤, 知子

---

**(Citation)**

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2):11-16

**(Issue Date)**

2009-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81001011>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001011>



## 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連

### The Relationship between Ibasho (Psychological Space One Doesn't Have Rootless Feeling) and Apathy Tendency

石本 雄真\* 倉澤 知子\*\*  
Yuma ISHIMOTO \* Tomoko KURASAWA \*\*

**要約：**本研究は、家族関係、学内友人関係、学外友人関係、恋人関係の関係性における居場所感が、大学生の学校適応の中心的な問題となるスチューデント・アパシーおよび意欲低下にどのような影響を与えるのかについて検討したものである。大学生 384 名に対して質問紙調査を行った。調査内容は、本来感、自己有用感の2因子からなる居場所感尺度、アパシー心理性格尺度、学業意欲低下、授業意欲低下、大学意欲低下の3因子からなる意欲低下領域尺度であった。その結果、男性では主に家族関係における自己有用感がアパシー心理および意欲低下に対して抑制的に影響しており、女性では主に学内友人関係における自己有用感がアパシー心理および意欲低下に対して抑制的に影響していた。恋人関係では、男性の本来感、女性の自己有用感が授業意欲低下に対して促進的に影響していた。男性の学内友人関係における自己有用感、学業意欲低下に対して抑制的な影響を与える一方、アパシー心理に対しては促進的な影響を与えており、居場所感が一様に適応的な影響を与えるのではない可能性が示された。

**キーワード：**居場所、スチューデント・アパシー、学校適応

#### 問題と目的

1992年、文部省は不登校問題に関連して、学校が「心の居場所」の役割を果たす必要性を提唱（文部省初等中等教育局, 1992）した。以来、青年のメンタルヘルスについて論じる際に、「こころの居場所」といった言葉や、「居場所がない」という表現が用いられることが多くなった。このような言葉や表現は、現在でも青年期の問題に関連して用いられることが中心であるものの、現在では乳幼児期（安齊, 2003；柴崎, 2003）から老年期（中原, 1998；三本松, 2000）まで、年齢や発達段階を問わずに用いられるようになってきている。また、本来居場所という言葉は物理的な「居る場所」を表すものであったが、不登校問題で用いられるようになって以降、心理的な意味で用いられ、物理的なものと心理的なものの両面を表すものとして用いられ、物理的な意味で用いられている場合であっても、「心が落ち着く（物理的）場所」（鈴木・中野, 2000）や「居心地のいい（物理的）場所」（矢島・鈴木, 2003）といったように、何らかの心理的な意味づけがなされた場所として用いられることが多くなってきており、多かれ少なかれ心理的な意味合いを持った言葉として使われるようになってきているといえる。しかし居場所という言葉の表す意味については一様では

なく、様々な意味で用いられているのが現状である。心理学研究においても居場所の定義は研究者によって様々であり、種々の定義による研究が並存している状態である。

その中でも、臨床心理学研究においては、居場所とはありのままにいられるところであると定義するものが多く、例えば廣井（2000）は、「居場所がある」ということは、自分自身でいることが受け入れられていると感じられることであるとしており、中原（2002）は、居場所は、自分がそこにもいい場であり、自分らしくいられる場であり、自分がありのままにそこにもいいと認知し得る感覚であるとしている。また、心の居場所に関する論議の発端となった不登校問題の現場においても、居場所として、子どもをありのまま受け入れることが大切であるという指摘がたびたびされている（朝日新聞社, 2000；2003a；2003b；2004；2005など）。最近では、臨床教育学の分野でも、居場所は、自分の気持ちを素直に表現してもそれが否定されないと、自分の役割が実感できるために自己肯定感が取り戻せる場所（廣木, 2005）とされている。また、「自分の気持ちを素直に表現しても否定されない」ということに加えて、「自分の役割が実感できる」ということが指摘されているように、実際に自分が役に立っていると思えることで、居場所を得ることができたといった事例（山咲・澤地, 2006；坂本, 1993）はいくつか

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程／伊丹市立総合教育センター適応教室やまびこ館

\*\* 神戸大学 発達科学部 卒業生

(2008年9月1日 受付)  
(2009年1月16日 受理)

みられる。さらに、心理学研究における居場所感の測定を試みる尺度の下位因子に「自分が役に立っていると思える感覚」を含むものが多い(例えば、中西, 2000; 秦, 2000; 大久保・青柳, 2002; 則定, 2008)。このように、教育や心理臨床などの分野では、居場所が「ありのままにいられる」と「役に立っていると思える」との2つのキーワードで語られることが多い。

居場所に関する議論は、居場所づくりの実践においても(例えば、荻野, 2008; 岡崎, 2008; 津布久, 2008)心理学研究においても(例えば、秦, 2000; 村瀬・重松・平田・高堂・青山・小林・伊藤, 2000; 中西, 2000; 則定, 2008), 居場所の確保によって精神的健康の向上を目指すことがひとつの共通の目標となっているが、心理学研究において居場所の確保と精神的健康の関連を検討したものは少なく、まだ十分な数の議論がなされているわけではない。さらに、上述したように、心理臨床における居場所の扱いや、居場所研究における測定尺度を概観することで、「ありのままにいられる」ということと「役に立っていると思える」という2つの感覚が心理学における居場所の中心的内容であることが推測できるが、そのような視点から居場所の確保と精神的健康との関連を検討したものは石本(2006; 2008a)によるものしかみられない。それらの研究では、中学生において関係性ごとの居場所感が精神的健康や学校適応に促進的な影響を与えることが示されたが、大学生においては、居場所感が学校適応に与える影響は示されなかった。このことに関して、中学生と大学生の学校適応という問題の差異を考えることができる。中学生においては、学校適応に関して中心的な問題として取り上げられるものは不登校であり、学校からの全面的な退却であると考えられる。一方、大学生においてはスチューデント・アパシーの問題が挙げられる。スチューデント・アパシーは不登校とは異なり、学校からの全面的な退却ではなく、部分的な退却を示すものである(笠原, 1981)。このことから大学生における学校適応は、石本(2006; 2008a)の研究では十分にとらえることができていないといえる。そこで本研究では、大学生における学校適応をスチューデント・アパシーの側面から捉えることによって、居場所感が大学生の学校適応に対してどのように影響を与えるのかについて検討する。

スチューデント・アパシーに関して、2005年の全国83校の国立大学生に対する調査(内田, 2008)によると、休学者の中でスチューデント・アパシー状態と考えられる者は14.75%、退学者の中では23.73%となっており、休学理由・退学理由の中では、およそ半数を占める積極的要因と環境要因を除くと、中心的な要因になっている。スチューデント・アパシーについては実証的な研究が少なく、統一的な定義もなされていない状態であるが(下山, 1996)、このように大学生における学校適応の中心の問題となっており、その実態や関連する要因についての研究が必要とされる。また、下山(1995)は、日本の大学生は特殊な状況に置かれているとした上で、日本の大学生の無気力は人格障害レベルのスチューデント・アパシーとは異なるものとした。大学生の学校適応を考える上では、一般的にみられる無気力と、人格障害レベルのスチューデント・アパシーの両面から検討することが必要であると考えられる。そのため、本研究では下山(1995)に従い、一般大学生の無気力と人格障害レベルのアパシーを区別した上で、居場所感が大学生の学校適

応にどのような影響を与えているのかを検討することとする。具体的には、下山(1995)が作成した、アパシーの心理障害を測定する尺度であるアパシー心理性格尺度と、一般大学生の領域別の無気力傾向を測定する意欲低下領域尺度を用いて大学生の学校適応の指標とする。一般的にスチューデント・アパシーは男子学生に特有の問題であるとされ、休学率・留年率ともに男子学生よりも女子学生の方が低い値を示している。しかし、近年男女差が小さくなってきているとの指摘(内田, 2008)があり、実際にスチューデント・アパシー状態であると考えられる者は女子学生の中にもみられること(内田, 2008)から、本研究では男子学生だけでなく、女子学生に対しても調査を実施し、その相違点についても検討することとする。

## 方 法

### 1. 調査対象者

近畿圏内の大学生384名(男性175名, 女性209名)平均年齢は20.63( $SD=1.68$ )歳であった。

### 2. 調査時期・調査方法

調査時期は2006年11～12月。授業時間に一斉に実施したほか、直接、または知人を通してアンケートを配布・回収した。

### 3. 調査内容

#### 【居場所感尺度】

石本(2006)が作成した居場所感尺度を用いた。この居場所感尺度は、居場所があるかどうかについての認知を直接測定するものではなく、関係性ごとにどの程度その関係性が居場所となっているかについて測定するものである。ありのままにいられることを表す「本来感因子」と必要とされている感覚を表す「自己有用感因子」の2因子から構成される(Table1)。これらの因子構成に関しては、居場所に関する先行研究から想定されたものであり、実際に因子分析において、2因子に分かれることが確認されている(石本, 2006)。

関係性における居場所感、それぞれの関係性ごとに居場所感の高さが異なるものである。先行研究(白井, 1998; 中村, 1999; 小畑・伊藤, 2001; 堤, 2002; 石本, 2005)では、自由記述によって挙げられた居場所のうち、物理的居場所を除くもので、家族、友人、恋人、バイト、サークル以外のものはほとんどみられなかった。このことから、本研究では大学生にとって居場所となり得る重要な関係性である、家族、学内友人、学外友人、恋人関係における居場所感をそれぞれ測定した。

それぞれ家族と一緒にいるとき、学部・学科・ゼミ等の友だちと一緒にいるとき、サークル・部活動・アルバイト等の友だちと一緒にいるとき、恋人と一緒にいるときの自分を想起するよう促したあと、どの程度あてはまるかを「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。また、項目についてもそれぞれの関係性ごとに対応するように、一部の語句を変えてある(Table2)。

#### 【アパシー心理性格尺度】

下山(1995)が作成したアパシー心理性格尺度を用いた(20項目)。「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」の5件法で回

答を求めた。

### 【意欲低下領域尺度】

下山(1995)が作成した意欲低下領域尺度を用いた(15項目)。「あてはまらない(1点)」から「あてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

Table1 居場所感尺度の項目

| 項目                  |
|---------------------|
| F1. 自己有用感           |
| 関心をもたれている           |
| 私がないと* *がさびしがる      |
| 自分が必要とされていると感じる     |
| 自分が役に立っていると感じる      |
| 自分に役割がある            |
| 私がないと* *が困る         |
| 自分の存在が認められていると感じる   |
| F2. 本来感             |
| これが自分だ、と実感できるものがある  |
| いつでも自分らしくいられる       |
| いつも自分を見失わないでいられる    |
| ありのままの自分が出せる        |
| 自分のやりたいことをすることができる  |
| いつでもゆるがない「自分」をもっている |

Table2 居場所感尺度のうち関係性ごとに語句を変更している項目

| 項目                  |
|---------------------|
| 家族                  |
| 私がないと家族がさびしがる       |
| 私がないと家族が困る          |
| 学部・学科・ゼミ等の友だち       |
| 私がないと友だちがさびしがる      |
| 私がないと友だちが困る         |
| サークル・部活動・アルバイト等の友だち |
| 私がないと友だちがさびしがる      |
| 私がないと友だちが困る         |
| 恋人                  |
| 私がないと恋人がさびしがる       |
| 私がないと恋人が困る          |

### 結果・考察

#### 1. 尺度の検討

居場所感尺度は先行研究と同様に本来感因子と自己有用感因子の2因子として分析に用いた。

アパシー心理性格尺度は作成時に十分な信頼性が確認されていないことから、あらためて項目分析および因子分析を行った。その結果、項目-全体相関(I-T相関)の低い項目が多いことや、先行研究で想定されていた因子構造が再現されないことから、項目-全体相関が低く削除することで全体の信頼性係数の上昇がみられる項目を順次削除した。項目削除後の9項目について主成分分析を行った結果、第1主成分のみが抽出されたことから、本研究ではアパシー心理性格尺度を1因子性の尺度として用いることとした(Table3)。原尺度(下山, 1995)から大幅な項目の削除を行ったため、原尺度と同等の尺度として用いることは困難であるが、項目内容からアパシーの心理障害について測定していると考え、本研究では9項目の尺度を用いることとした。アパシーの心理障害を測定する尺度につ

いては、今後より精度の高いものを作成する必要があるといえる。意欲低下領域尺度は先行研究と同様に学業意欲低下因子、授業意欲低下因子、大学意欲低下因子の3因子として分析に用いた。

各尺度の $\alpha$ 係数、平均値、標準偏差をTable4に示す。

#### 2. 居場所感の性差

家族関係、学内友人関係、学外友人関係、恋人関係における居場所感について、男性と女性の居場所感の平均値の差を検定した結果をTable4に示す。家族居場所感およびその下位尺度である家族自己有用感と家族本来感、学外友人居場所感とその下位尺度である学外友人自己有用感および学外友人本来感において男性と女性に有意な得点の差があり、家族居場所感については女性の得点の方が(居場所感: $p < .01$ , 自己有用感: $p < .05$ , 本来感: $p < .01$ ), 学外友人居場所感については男性の得点の方が(居場所感: $p < .01$ , 自己有用感: $p < .05$ , 本来感: $p < .01$ )高かった。家族関係においては女性の方が居場所感を感じており、学外友人関係においては男性の方が居場所感を感じていることが明らかになった。

本研究と同様に関係性ごとの居場所感を研究している石本(2008b)では本研究の結果とは異なり、恋人関係において居場所感の性差が示されており、友人関係や家族関係における性差は示されていない。この結果の差異について、明確な原因は明らかではないが、石本(2008b)の研究では男性調査対象者の数が少なく、このことが結果に影響を与えている可能性も考えられる。家族関係における居場所感の性差について、竹尾・杉村・山崎(2005)によると、大学生では男性よりも女性のほうが親子関係を親密であるととらえており、親子関係の親密さが家族関係の居場所感につながっている可能性が考えられる。学外友人関係の居場所感の性差について、心理学における大学生の学外友人関係や課外活動等に関する研究はほ

Table3 アパシー心理性格尺度の項目およびI-T相関結果

| 項目                                  | I-T相関 |
|-------------------------------------|-------|
| 1 × よく眠れて朝は爽快な気分で起きられる *            | .24   |
| 2 × 一度決めたことでも人から言われると決心が変わりやすい      | .32   |
| 3 × 心から楽しいと感じる時がある *                | .32   |
| 4 × きちんとしていないと気が済まない                | -.16  |
| 5 毎日を何となく無駄に過ごしている                  | .58   |
| 6 自分が本当に何をやりたいのかわからない               | .55   |
| 7 自分の人生を生きているという実感がない               | .69   |
| 8 × 人からの批判がとても気になる                  | .32   |
| 9 いつも頭がぼんやりしている                     | .57   |
| 10 自分の将来といっても現実感がない                 | .59   |
| 11 何事も生き生き感じられない                    | .59   |
| 12 × 自分が何をしたいかよりも何が自分に期待されているかを優先する | .31   |
| 13 × 朝起きて夜眠る生活のリズムが乱れている            | .25   |
| 14 自分のしていることに自信がない                  | .61   |
| 15 × 人に対して自分の意見や考え方をはっきりと主張する       | .20   |
| 16 × 勝負負けにこだわる                      | .03   |
| 17 時間がただ過ぎていくという感じがある               | .60   |
| 18 何となく大学まで来てしまったという感じがある           | .55   |
| 19 × 自分の悩みを何でも話せる友人がいる *            | .20   |
| 20 × 自分の弱みを人に知られたくない                | .26   |

×の表記は検討の結果採用しなかった項目を示す

\*の表記は逆転項目を示す

Table4 各尺度の信頼性係数, 平均値, SD, および男女間による比較

|          | $\alpha$ | 全体  |            | 男   |            | 女   |            | 男女比較     |
|----------|----------|-----|------------|-----|------------|-----|------------|----------|
|          |          | n   | 平均値 (SD)   | n   | 平均値 (SD)   | n   | 平均値 (SD)   | t 値      |
| 家族居場所感   | .85      | 377 | 3.62 (.67) | 171 | 3.51 (.63) | 206 | 3.71 (.68) | -2.96 ** |
| 家族自己有用感  | .86      | 380 | 3.61 (.78) | 173 | 3.50 (.78) | 207 | 3.70 (.76) | -2.55 *  |
| 家族本来感    | .83      | 380 | 3.62 (.79) | 172 | 3.50 (.78) | 208 | 3.71 (.78) | -2.64 ** |
| 学内友人居場所感 | .86      | 375 | 3.28 (.65) | 168 | 3.26 (.64) | 207 | 3.30 (.66) | -.60     |
| 友人自己有用感  | .90      | 375 | 3.13 (.74) | 168 | 3.07 (.77) | 207 | 3.17 (.70) | -1.32    |
| 友人本来感    | .86      | 378 | 3.45 (.75) | 170 | 3.47 (.73) | 208 | 3.44 (.76) | .34      |
| 学外友人居場所感 | .91      | 360 | 3.54 (.77) | 160 | 3.68 (.75) | 200 | 3.42 (.76) | 3.21 **  |
| 友人自己有用感  | .91      | 361 | 3.54 (.80) | 160 | 3.64 (.81) | 201 | 3.47 (.79) | 2.02 *   |
| 友人本来感    | .90      | 362 | 3.53 (.87) | 161 | 3.73 (.83) | 201 | 3.38 (.87) | 3.94 **  |
| 恋人居場所感   | .88      | 161 | 4.08 (.66) | 75  | 4.07 (.65) | 86  | 4.09 (.67) | -.15     |
| 恋人自己有用感  | .88      | 161 | 4.17 (.69) | 75  | 4.17 (.70) | 86  | 4.17 (.67) | -.06     |
| 恋人本来感    | .88      | 164 | 3.97 (.77) | 77  | 3.95 (.74) | 87  | 4.00 (.79) | -.42     |
| アパシー心理性格 | .88      | 372 | 2.89 (.86) | 168 | 2.86 (.88) | 204 | 2.91 (.85) | -.56     |
| 意欲低下領域   | .80      | 373 | 2.77 (.63) | 167 | 2.83 (.62) | 206 | 2.73 (.63) | 1.51     |
| 学業意欲低下   | .69      | 373 | 2.95 (.62) | 168 | 3.03 (.61) | 205 | 2.88 (.62) | 2.43 *   |
| 授業意欲低下   | .72      | 374 | 2.99 (.92) | 168 | 3.05 (.90) | 206 | 2.93 (.93) | 1.18     |
| 大学意欲低下   | .72      | 375 | 2.41 (.79) | 168 | 2.48 (.82) | 207 | 2.35 (.76) | 1.54     |

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$ 

とんどみあたらず、本研究の結果についての考察は困難である。大学生の学外友人関係や課外活動について今後も知見を積み重ねる必要がある。

### 3. アパシー心理, 意欲低下の性差

アパシー心理, 意欲低下について, 男性と女性の平均値の差を検定した結果を Table4 に示す。アパシー心理では有意な差がみられず, 意欲低下については学業意欲低下においてのみ有意な差がみられた。男性の方が女性よりも学業意欲低下得点が高かった( $p < .05$ )。これまでスチューデント・アパシーは男性特有のものであるとされ, 男らしさ形成の葛藤が背景要因として挙げられていたが, その症状に着目する限りにおいては, 明確な性差がみられないことが明らかになった。このことは大学生における男女の休学率・留年率の差が縮まっていることから推察され, 今後は女子学生のスチューデント・アパシーについても注意を払う必要があるといえよう。意欲低下についても授業意欲低下, 大学意欲低下では性差がみられなかった。性差がみられた学業意欲低下について, 下山 (1995) は大学意欲低下とは質的に異なり, より軽度なものであるとしており, スチューデント・アパシー問題における性差というよりは, 一般的な男子大学生と女子大学生の学業に対する意欲の差が反映されたものであると考えることができる。

### 4. 心の居場所がアパシー心理, 意欲低下に与える影響

アパシー心理, 意欲低下領域尺度の下位因子を従属変数とし, 関係性ごとの居場所感の下位因子を独立変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った (Table5)。居場所感において性差がみられたことから, 男女に分けて分析を行った。その結果, 関係性ご

とにアパシー心理や意欲低下に影響を与える因子が異なっていることが分かった。家族との関係における自己有用感, 男性においてアパシー心理や学業意欲低下, 大学意欲低下を抑制することが示された。学内友人との関係における自己有用感, 女性においては一貫してアパシー心理や意欲低下を抑制することが示されたが, 男性においては学業意欲低下を抑制するものの, アパシー心理に対しては促進的な影響を与えていることが示された。恋人との関係における居場所感について, 男性では本来感が, 女性では自己有用感が授業意欲低下に対して促進的な影響を与えていることが示された。なお, 独立変数間に相関が認められることから, VIF を参考に多重共線性の確認を行ったが, 全て VIF  $< 2$  となったため多重共線性の発生はないと判断した。

石本 (2008a) の結果とは異なり, 大学生においてもスチューデント・アパシーや意欲低下といった面からとらえると, 居場所感は学校適応に種々の影響を与えていることが明らかになった。石本 (2008b) の結果では, 家族関係における居場所感に精神的健康に対してもほとんど影響を与えていなかったが, 本研究からは, 男性では家族関係において必要とされていると思えているほど, 意欲が低下したり, アパシー心理に陥ったりすることがなくなることが示された。男性において学内友人関係での自己有用感がアパシー心理に対して促進的に影響を与えていたことについては, 女性では学内友人関係での自己有用感がアパシー心理に抑制的な影響を与えている上, 男性においても本来感がアパシー心理と意欲低下に対しては抑制的な影響を与えていることから, 非常に特徴的な結果であるといえる。一般的に考えると, 学内の友人に必要とされていると思えることは, 一般学生の意欲低下に対して抑制的な効果があるという結果のように, アパシー心理に対しても抑制的な効果がある

Table5 男女別重回帰分析結果 (居場所感→アパシー心理, 意欲低下)

| 独立変数 | 従属変数  | アパシー心理   |          | 学業意欲低下  |         | 授業意欲低下 |          | 大学意欲低下   |          |
|------|-------|----------|----------|---------|---------|--------|----------|----------|----------|
|      |       | 男性       | 女性       | 男性      | 女性      | 男性     | 女性       | 男性       | 女性       |
|      | $R^2$ | .267 **  | .317 **  | .152 ** | .057 *  | .046 * | .135 **  | .181 **  | .275 **  |
| 家族   | 自己有用感 | -.304 ** |          | -.262 * |         |        |          | -.354 ** |          |
|      | 本来感   |          |          |         |         |        |          |          |          |
| 学内友人 | 自己有用感 | .377 **  | -.311 ** | -.266 * | -.263 * |        | -.404 ** |          | -.533 ** |
|      | 本来感   | -.536 ** |          |         |         |        |          | -.224 *  |          |
| 学外友人 | 自己有用感 |          | -.377 ** |         |         |        |          |          |          |
|      | 本来感   |          |          |         |         |        |          |          |          |
| 恋人   | 自己有用感 |          |          |         |         |        | .247 *   |          |          |
|      | 本来感   |          |          |         |         | .244 * |          |          |          |

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$ 

ことが想像できるが、今回の結果は全く逆のものとなった。このことについて、今後スチューデント・アパシーを示す男子学生の友人関係について、臨床的知見の蓄積や実証的データの収集をすることでその原因の解明が期待される。また、恋人関係において男性では本来感、女性では自己有用感がそれぞれ授業意欲を低下させていることについて、過度に恋人関係を居場所とすることが授業をさぼるといった行動につながるということが考えられるが、アパシー心理に対しては恋人関係の居場所感は影響を与えておらず、学校適応への影響はないことが示された。これらの結果に関して、家族居場所感や学内友人居場所感が学業意欲低下に与える影響および、恋人居場所感が授業意欲低下に与える影響については、標準偏回帰係数の値が必ずしも大きい値であるとはいえず今後調査を重ねることでそれらの関係性について再検討することも必要であるといえよう。

## 討 論

先行研究(石本, 2008a)では、大学生における居場所感の学校適応への影響は示されなかったが、本研究においてスチューデント・アパシーという視点からとらえなおした結果、大学生においても居場所感が学校適応に影響を与えていることが示された。男性では、家族との関係において必要とされていると思えることで学校適応が高まることが示された。それに対して、女性では主に学内友人との関係において必要とされていると思えることが学校適応を高めることが示された。男性において、学内友人との関係における自己有用感と本来感が、アパシー心理に対してそれぞれ逆の影響を与えていること、自己有用感にはアパシー心理に対しては促進的な影響を与えている一方で、学業意欲低下に対しては抑制的な影響を与えていること、さらに自己有用感がアパシー心理に与える影響については性別によっても逆の効果がみられることは注目すべき点である。このことについて、本研究ではその背景を明らかにすることは困難であるが、居場所感が一様に適応的な影響を与えるわけではないということは、留意すべき点であるといえる。また、標準偏回帰係数の値は大きくないものの、恋人との関係における居場所感が授業意欲の低下に促進的な影響を与えていたことについて、授業意欲の低下が必ずしも不適応的なものではないことが示唆されていること(下山, 1995)や、恋人関係における居場所感が精神的健康に対しては

促進的な影響を与えることが示されていること(石本, 2008a)から、恋人関係における居場所感は両価的な意味を持つものであることが示されたといえよう。

本研究では関係性における居場所感がアパシー心理や意欲低下に与える影響の、その現象についてのみ明らかにしたが、その影響が生じる背景要因については考察することができなかった。今後は居場所感がアパシー心理に影響を与えるメカニズムについてのより詳細な検討が必要とされる。そのような背景要因およびメカニズムについて明らかにすることで、実際にスチューデント・アパシーを示す学生に対する臨床的対応への応用が期待される。

(付記) 本研究は倉澤知子が発達科学部に提出した卒業論文のデータを用いて、新たに分析・検討したものである。本研究の要旨は日本青年心理学会第16回大会で発表した。

## 引用文献

- 安齊智子 2003 「居場所」概念の変遷 発達, 第96号, 33-37.  
 朝日新聞社 2000 不登校の子どもたちが集うサークル「ラフ」(リポート山梨) 11月5日朝刊  
 朝日新聞社 2003a 不登校:3 居心地のよい場所必要(ゆらぐ教育) 10月18日朝刊  
 朝日新聞社 2003b 居場所「ありのまま」受け入れて(コドモたちはどこにいる?) 7月23日朝刊  
 朝日新聞社 2004 自分嫌い 劣等感, 居場所がない(10代の入り口で:中) 7月16日朝刊  
 朝日新聞社 2005 6時間 傷とともに進もう 2月27日朝刊  
 秦彩子 2000 「心の居場所」と不登校の関連について 臨床教育心理学研究, 26(1), 97-106.  
 廣井いずみ 2000 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究, 18, 129-138  
 廣木克行 2005 臨床教育(Clinical Education) 一子どもの居場所をつくる(神戸大学発達科学部編集委員会 編 キーワード人間と発達) 大学教育出版 106-107.  
 石本雄真 2005 心の居場所に関する理論的考察 日本青年心理学会第13回大会発表論文集, 66-67.

- 石本雄真 2006 対人関係からとらえる青年期の心の居場所～中学生と大学生に対する調査を通して～ 神戸大学大学院総合人間科学研究科人間発達科学専攻 平成 17 年度 修士論文 (未公開)
- 石本雄真 2008a 関係性ごとの居場所感が精神的健康および学校適応に与える影響 日本発達心理学会第 19 回大会論文集, 736.
- 石本雄真 2008b 居場所感に関連する大学生の生活の一側面 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2, 1-6.
- 笠原嘉 1981 スチューデント・アパシー第三報 現代のエスプリ, 第 167 号, 24-28.
- 小畑豊美・伊藤義美 2001 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類— 情報文化研究, 第 14 号, 59-73.
- 文部省初等中等教育局 1992 学校不適応対策調査研究協力者会議 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文 2000 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ 通所中間施設のもつ治療・成長促進的要因 心理臨床学研究, 18, 221-232.
- 中原陸美 1998 中高年脳卒中患者の障害受容と援助—リハビリ意欲と居場所との関係に着目して— 心理臨床学研究, 15, 635-645.
- 中原陸美 2002 受診が著しい遅延した重症局所進行乳癌患者の心理社会的背景の検討—依存のあり方と居場所感をめぐって— 心理臨床学研究, 20, 52-63.
- 中村泰子 1999 「居場所がある」と「居場所がない」との比較—○△□法の基礎的研究として— 児童・家族相談所紀要, 16, 13-22.
- 中西友美 2000 若い世代の母親の居場所感についての基礎研究 臨床教育心理学研究, 26, 87-96.
- 則定百合子 2008 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 荻野ゆう子 2008 親がつくる「心の居場所」 児童心理, 62, 515-519.
- 岡崎勝 2008 教師が作る一楽しさと厳しさを通して 児童心理, 62, 506-510.
- 大久保智生・青柳肇 2002 青年用適応感尺度作成の試み—居場所の視点から— 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集, 320.
- 坂本昇一 1993 登校拒否のサインと心の居場所 小学館
- 三本松政之 2000 高齢者と居場所—新しい福祉のあり方— (現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ 3—現代人の居場所—) 至文堂 193-203.
- 柴崎正行 2003 乳幼児は心の拠り所をどのように形成していくのか 発達, 第 24 号, 2-4.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 下山晴彦 1996 スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究, 44, 350-363.
- 白井利明 1998 若者に居場所はあるのか 大学進学研究, 108, 54-59.
- 鈴木智子・中野明徳 2000 学校空間と心の居場所 福島大学教育実践研究紀要, 第 39 号, 55-62.
- 竹尾和子・杉村和美・山崎瑞紀 2005 「親子関係の親密さ」尺度の改訂 日本心理学会第 69 回大会発表論文集, 1103.
- 津布久幸恵 2008 養護教諭の役割—かおるちゃん笑顔は世界— 児童心理, 62, 511-514.
- 堤雅雄 2002 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), 36, 1-7.
- 内田千代子 2008 大学における休・退学, 留年学生に関する調査 第 28 報 茨城大学保健管理センター内「休・退学, 留年学生調査」事務局
- 矢島洋子・鈴木陽子 2003 子どもの「居場所」からみた家族・社会 UFJ Institute report, 9(1), 73-91.
- 山咲さくら・澤地妙 2006 私の居場所はどこ? 中学校編—保健室で受けとめた子どものサイン— 農文協